

# CENTENARY

2012. 9. 24  
第 71 号  
兵庫県立加古川西高等学校



文武両道による人格の形成

## 校歌特集

### 第2弾

今回は本校校歌を特集しました。

今回は、記念式典でも歌う本校の前身、兵庫県立加古川高等女学校の校歌を紹介します。

まず**歌詞**です。下にも示していますが、尾上八郎という人の作詞になります。

この尾上八郎氏は、津山藩士の子として生まれ、後に兵庫県竜野に移住しています。そして上京して東京帝国大学（現東大）に学び、卒業後は早稲田大学や学習院女子大学の教授を務めました。そして大正時代の初め、



尾上八郎

20世紀に入って10年、本校校歌の作詞を担当しました。

また、戦後は歌会始の選者もされました。その他、書画にも精通していたと言われています。

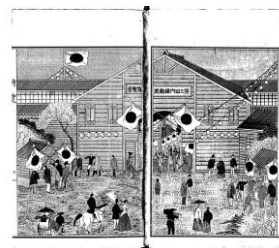
特に歌詞の三番で、社会の目先の流行に惑わされることなく凛とした女性になれ、と言っています。これは現在にも通じる立派な言葉だと思えます。

次に**作曲**です。

作曲者の島崎赤太郎氏は東京音楽学校の教授でした。

東京に生まれ、一家をあげてクリスチャンとなつています。父熊二郎は大工の棟梁で、1890年の第3回国博覧会に自ら作製したオルガンを出品しています。そのせいか、

赤太郎氏は子供の頃からオルガンに興味を示し、成長して東京音楽学校へ入学。ドイツのライプチヒ王立音楽院へ留学して



第3回国勸業博覧会

オルガンと作曲を学びました。

帰国して東京音楽学校の教授となった赤太郎氏はオルガンと音楽理論を教え、一方で小学校から大学まで数多くの校歌も作曲しました。

なお余談ながら、こんな歌を知っていますか？それは、「山形県民歌「最上川」です。

この歌は、昭和天皇の詩に島崎赤太郎が曲をつけたもので、現在も山形県で歌われているということです。



島崎赤太郎

兵庫県立

加古川高等女学校

「校歌」

作詞 尾上八郎

作曲 島崎赤太郎

一、千早ぶる神の御代より

清き名の高きこの国  
年経たる松にふきたつ  
風の音もすめるこの里

二、かかる国かかる里わに

幸多く生れし吾ら  
ねもごろの  
師のみをしへに  
ころさへ

身さへぞのぶる

三、年毎に花とうつろふ

都辺のてぶり習はず  
つつましく  
やさしく強く

美はしき乙女とならむ

四、加古川の瀬々ゆく水の

絶えせざる力をもちて  
限りなき学びの道を  
たゆみなく  
すゝみてゆかむ

**ちょっと一言** 毎年夏に加古川プラザホテルで松筠同窓会の会員大会が行われます。(今年は100周年の準備で行われませんでした…)会員大会では華松会(還暦を迎えられた会員の会)や、青松会(卒業後20年目を迎えた会員の会)の入会式や本校にゆかりのある方のアトラクション、そして先輩、後輩、旧友たちとの楽しい語らいの場が演出されます。最後に高等女学校と西高の校歌を歌うのですが、女学校の方々が中心となり、大きな声で堂々とそして何より誇らしげに歌われる女学校の校歌を聞くたびに、先輩方に負けない、西高に誇りを持った後輩たちを育てなければという思いを強くします。